

フジバカマ

■フジバカマとは

秋になると庄川や小矢部川、神通川などの堤防の草むらに、背の高い草が何種類か伸び出してきます。赤い花をつけるハギや黄色い花のセイタカアワダチソウ、ヨモギなどです。フジバカマもその一つです。

フジバカマは、茎をまっすぐに立ちあげ、途中から枝を出し、先に細かいヒゲのようなものを出した小さな花をたくさん咲かせます(写真)。また「秋の七草(ハギ、ススキ、クズ、カワラナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ)」のひとつとしても名の知られている植物です。

葉を2,3枚つま取って、机の上などに置いておくと、桜もちのようないいにおいがしてきます。これは葉が乾いていく途中で、中の細胞がこわれ、中からクマリンというにおいのもとが外に出てくるためです。これがよく似ているヒヨドリバナという植物とのよい区別点になります。

葉の裏を虫めがねでみると、小さな黒い点(ときには透明)がびっしりとついているのが特徴です。フジバカマにはありません(表)。



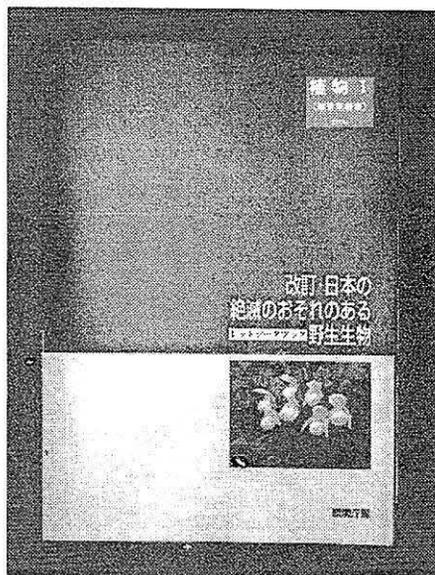
表.フジバカマとヒヨドリバナの区別のしかた

	フジバカマ	ヒヨドリバナ
葉の形	3つに分かれた葉がある (あまり分かれられないこともある)	葉は3つに分かれられない
葉の裏の小さな点 (ルーペで見る)	なし	あり
乾くときのおい	桜もちのいいにおいがする	いいにおいはしない

■ 絶滅するかも知れない植物

「レッドデータブック」と呼ばれる本があるのを知っていますか（写真）。この本には、生き物の名前がずらりと並んでいて、なにやら「絶滅のおそれ」ということばが目立ちます。この本は、近い将来に日本から絶滅してしまうかも知れない生き物のリストなのです。レッドは「赤」で、危険なことをイメージしています。

2000年7月に発表された植物のレッドデータブックには、1,665種類（日本の植物の種類は約7,000）もの植物が載っています。フジバカマもこの中に含まれています。植物の種類が減っていく主な原因は、人間が住宅や田畑、工場、道路、遊び場などを作るために、湿地や丘陵地の林、草原をなくし続けているためです。



■ フジバカマをまもるには

フジバカマの生える環境である草原は、毎年草刈りが行われることによって草原としての状態が続きます。草を刈らないでいると、2、3年で木が生えてきてやがてそこは森になってしまいます。森にはフジバカマはすめません。何年も草原の状態が続くところといえば、今では川の堤防ぐらいしかありません。その堤防というのは、まさに人間によって管理されている場所ですね。本来、自然の草原に生えているはずのフジバカマが、人間の管理する堤防だけに生えているということは、いつも草原になっている環境が他にないことを意味します。行き場所がなくなった絶滅のおそれのあるフジバカマを守るには、人間が草を刈り続けなくてはならないという、ちょっとおかしな関係があるのです。 (太田 道人)



富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31 (TEL. 076-491-2123)

<http://www.tsm.toyama.toyama.jp>

平成12年10月10日